

# キャリア開発学科におけるアクティブラーニングの実践に関する調査報告

岩田京子<sup>1)</sup> 酒見康廣<sup>1)</sup> 有田真貴子<sup>2)</sup> 大塚絵里子<sup>2)</sup>

## A Report on Active Learning in the Division of Career Development: Questionnaire and Practice

Kyoko Iwata<sup>1)</sup> Yasuhiro Sakemi<sup>1)</sup> Makiko Arita<sup>2)</sup> Eriko Otsuka<sup>2)</sup>  
(2016年11月25日受理)

### 1. はじめに

近年、大学でのアクティブラーニング（以下、AL）の必要性や重要性が叫ばれるようになり、大学ではALのあり方についての議論や、担当授業へのALの導入についての検討や試行が盛んになってきている。ALが推奨されるようになったもとは、中央教育審議会（2012）の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」にあるとされている。その中では、大学教育での「受動的な受講」から「能動的な学修（アクティブラーニング）」への転換の必要性が謳われている。学生の立場でいえば、受動的な受講者から能動的な学修者になるための手段がALである。

しかし、授業の担当者にとってはALの必要性は容易に理解できるものの、それを自分の担当授業にどう取り入れるかとなると、授業のもともとの形態や受講者数、科目の特性など様々な要因により、ALの導入が決して容易なものではないという認識のもと、戸惑いや試行錯誤を繰り返している教員が多いのが実情ではなかろうか。

そこで、中村学園大学短期大学部（以下、本学）キャリア開発学科（以下、本学科）でのALについての現状と課題についての調査を行うとともに、本学科教員のAL導入への多少なりの動機付けやヒントを提供することを目的としたプロジェクト研究（テーマ：「キャリア開発学科におけるアクティブラーニング実践についての研究」）（平成27～28年度）を開始した。本稿では、本プロジェクト研究で行われたALに関するアンケート調査の結果とUR都市再生機構九州支社（以下、UR）との連携で行われた団地での高齢者支援（以下、荒江団地プロジェクト）の途中経過を報告する。

### 2. アクティブラーニングの定義と分類

文科省によるALの定義は、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」となっている（前述の中央教育審議会審答）。また、山地（2014）は、ALを「思考を活性化する」学習形態として定義しており、溝上（2007）はALを「学生の自らの思考を促す能動的な学習」として定義している。

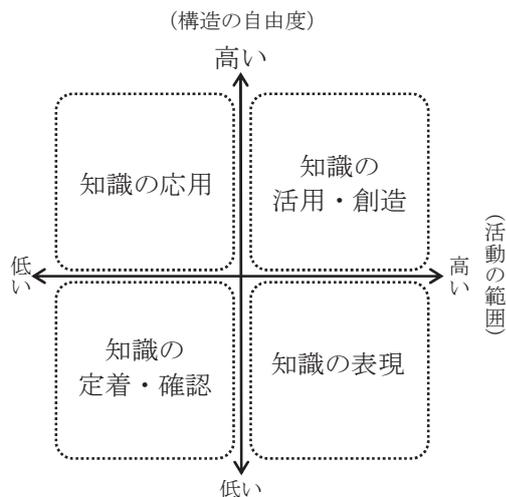
本研究では、ALを最広義の意味で捉え、「学生を自律的な能動的な学修者にするための手段」と定義する。すると、次に示すALの形態の分類に見られるように、従来行われてきた授業形態には、ALに相当するものが結構あることがわかる。従来、ALとは認識しないまま実践してきたことを改めてALであると捉え直すことにも意義があるのかもしれない。ALの実施についても、毎回の授業で繰り返し行う場合、授業の一部分で行う場合、複数の形態を組み合わせで行う場合など様々である。ALを最広義の意味で捉え、授業の一部でも実施することを含めれば、すべての科目にALの導入は可能であると考えられる。

ALの形態には様々なものがあるが、山地（2014）によれば、「構造の自由度」と「活動の範囲」により大きくは4つの領域に分類される（図表1）。この具体例を挙げると、以下のようなになる。

別刷請求先：岩田京子，中村学園大学短期大学部キャリア開発学科，〒814-0198，福岡市城南区別府5-7-1  
E-mail：kyoko@nakamura-u.ac.jp

1) 中村学園大学短期大学部キャリア開発学科教授 2) 中村学園大学短期大学部キャリア開発学科助手

図表1：ALの形態分類



### A. 知識の定着・確認型

- ・小テスト・演習問題を解く
- ・リスponsアナライザー (クリッカー) で教員からの質問に答える
- ・授業の理解度アンケート・振り返りシートに答える
- ・グループで教え合いながら学ぶによる協調学修・協同学修をする (グループワーク)
- ・授業のまとめ・感想・コメント・質問を書く (ミニッツ・ペーパー, リフレクションペーパー)
- ・グループで相互に教え合う (協調学修)
- ・グループで相互に記述したものを添削する
- ・反転授業 (フリップラーニング) で事前学修する
- ・反転授業 (フリップラーニング) で協働授業に取り組む
- ・情報収集, 調査
- ・eラーニングで学修する
- ・実験をする
- ・演習をする

### B. 表現型

- ・教員からの指名質問に答える
- ・教員からの全体への質問に答える
- ・教員と質疑応答する
- ・学生同士で質疑応答する (グループディスカッション)
- ・レポート課題・宿題・ライティングに取り組む
- ・プレゼンテーション (成果発表) をする
- ・作品を制作する
- ・学生同士でディベート (一定のルールの下に議論をゲームとして行う)
- ・グループで, フレームワークを用いて意見をまとめる

### C. 応用型

グループワークで, コミュニケーション能力や, 多様な考えを知る力を養う。知識を用いた専門教育の中や, 教室外での視察や体験で実施することが多い。

- ・グループで, KJ法などを用いて問題点の構造を探る
- ・シミュレーションゲーム (ゲームによる疑似体験)
- ・ケースメソッド (事例問題解決学修)
- ・問題解決学修 / 問題発見学修 (Problem Based Learning, 与えられた課題から解決策を見出す学修活動)

### D. 知識の活用・創造型

- ・フィールドワーク
- ・インタビュー・質問紙による調査, 野外観察
- ・体験学修 (インターンシップなど)
- ・課題解決学修 / 課題発見学修 (Project Based Learning, 自ら見出した課題から目標と目的を設定してそれへ向かう学修活動)
- ・創成学修 (興味ある内容を自主的にプロジェクトとする学修活動)

## 3. アクティブラーニングの実態調査

本学科の専任及び非常勤の全教員を対象として, AL についての実態を把握するためのアンケート調査を, 平成28年3月に実施した。実際に使用したアンケート調査用紙は付録1と付録2に示している。

ALの形態は, 前節に記したように種類が多いが, アンケートでは回答を得やすくするために, 種類をかなり絞り込み, 領域の分類も3つにまとめたもので実施した。アンケートでは, 担当する科目ごとに, 該当するALの学修形態の項目にチェックを付け (複数選択可), 複数の項目をグループ化したものの中のいずれかの項目に対する自己評価 (A: かなり取り入れている, B: ある程度は取り入れている, C: 一部に取り入れている, D: 取り入っていない) を付ける形式にした。ここでの自己評価は, 教員がALを実施してよかったか, 悪かったかというものではない。教員自身がどの程度ALを導入・実施しているかを評価したかというものである。

ALの学修形態は, 能動性の低い方から高い方へ, 知識の定着型・表現志向型・知識の活用型 / 応用指向型と大きく3つの領域に分け, それぞれをいくつかのグループに分けた。自己評価は, 1年後に再調査したときの本人自身の振り返りのためのものである。また, AL実施で効果があった具体的工夫事例を「アクティブラーニングチップス」として, 自分自身の実施体験や知識も併せて記述する方式にした。

調査結果は, 図表2～4に示す。「科目数」は回答の

あった科目の数、「自己評価」はそのグループ内での評価点の平均点を表す。アンケート調査の回答数は59科目（各授業担当者の担当科目数の合計71科目の中）で、回答率83.1%、教員実人数としての回答数は16名（対象者36名中）で、回答率44.4%であった。

図表2は授業の受講者数で件数の多い順に並べ替えたもので、30名未満の少人数と、100名以上の大人数の科目が多かった。図表3はALの形態別に導入した科目数の多い順に並べたもので、30件以上が「レポート」「小テスト・演習問題」、20件以上が「グループ学習、グループワーク」「プレゼンテーション」「質疑応答」、10件以上が「理解度、振り返り、質問の記入」「情報収集、調査、観察」「演習、実験」となっており、普段よく目にする

図表2：受講者数別の回答科目数

| 受講者数      | 科目数 |
|-----------|-----|
| 30名未満     | 17  |
| 100名以上    | 17  |
| 30～60名未満  | 13  |
| 60～100名未満 | 9   |

※3科目未回答

図表3：ALの形態別の導入科目数

| ALの形態             | 科目数 |
|-------------------|-----|
| レポート              | 36  |
| 小テスト・演習問題         | 30  |
| グループ学習、グループワーク    | 28  |
| プレゼンテーション         | 27  |
| 質疑応答              | 21  |
| 理解度、振り返り、疑問、質問の記入 | 17  |
| 情報収集、調査、観察        | 14  |
| 演習、実験             | 14  |
| 課題解決型学修（PBL）      | 9   |
| フィールドワーク          | 8   |
| 反転授業              | 7   |
| ケースメソッド           | 6   |
| 作成                | 4   |
| 体験学修（インターンシップなど）  | 2   |
| eラーニングの活用         | 2   |
| 創成学修              | 1   |
| ディベート             | 1   |
| シミュレーションゲーム学修     | 0   |

ような授業形態が反映された結果となっている。図表4はALの形態をグループ化したものへの、担当者の自己評価の高い順に並べ替えたもので、科目数の多いものほど自己評価も高くなる傾向が見られる結果となっている。これは、教員の自分が実施しているALへの評価を高く見ている結果であると思われる。図表5は受講者数別に集計した結果であるが、課題解決型学修（PBL）が30名未満の場合に多いことがわかる。それ以外では目立った大きな差はみられない。

アクティブラーニングチップスとして以下のことが記述されていた。

- ・テスト対策のクラスではあるが、総合的英語力を伸ばすため「TV/Radio project」という、自分の好きなテレビ／ラジオの語学番組を見て、レポートを書くという課題を出している。
- ・カルテット（4枚カード）のゲームを通して、乳幼児の食生活のポイントを印象付けるように工夫しています。カルテットについては、ドイツの家族で楽しんでいるカードゲームであり、栄養学の溝上美代子先生から紹介され、活用しています。
- ・乳幼児向けの遊びについては、現在、学生は受動的に受講しているので、グループごとに、年齢に合わせた遊びを1つずつ発表させ、他の学生がそれを真似て体験学習するやり方を検討中。
- ・4人ずつのグループで、テレビ番組を創作し、生放送風景として発表する。4人が番組出演者として、司会者、タレント、学者などそれぞれ異なる役柄になる。クイズ番組やトーク番組など形式は自由。芸能界などの雑談から、数学の話題へと導く。学者役が詳しく説明するが、タレント役がわからない部分への突っ込みいれたりして、視聴者が番組を楽しんでいるうちに、数学の内容が自然と頭に入るような番組を目指す。

本調査ではALを広義で捉えているためもあるだろうが、ALは多くの科目で実施されているという印象を受けた。これには、従来、実施していた授業形態を教員が改めてALであると認識した部分もかなりあるものと思われる。ただ、そのALの形態としては「知識の定着・確認型」が多く、構造の自由度がより高く、活動の範囲がより高い「知識の活用・創造型」はまだ少ない。今後は、「知識の活用・創造型」のALの実践が本学科の課題になるだろう。

図表4：ALの形態別導入科目数と教員の自己評価

| ALの形態            |                   | 科目数 | 教員の自己評価※ |
|------------------|-------------------|-----|----------|
| 知識の定着型           | 小テスト・演習問題         | 30  | 2.2      |
|                  | 理解度、振り返り、疑問、質問の記入 | 17  |          |
|                  | 演習、実験             | 14  |          |
| 表現指向型            | レポート              | 36  | 1.9      |
| 知識の定着型           | グループ学修、グループワーク    | 28  | 1.9      |
|                  | 質疑応答              | 21  |          |
|                  | 情報収集、調査、観察        | 14  |          |
| 表現指向型            | プレゼンテーション         | 27  | 1.0      |
|                  | 作成                | 4   |          |
|                  | ディベート             | 1   |          |
| 知識の活用型／<br>応用指向型 | 課題解決型学修 (PBL)     | 9   | 0.7      |
|                  | ケースメソッド           | 6   |          |
|                  | 創成学修              | 1   |          |
|                  | シミュレーションゲーム学修     | 0   |          |
| 知識の活用型／<br>応用指向型 | フィールドワーク          | 8   | 0.6      |
|                  | 体験学修 (インターンシップなど) | 2   |          |
| 知識の定着型           | 反転授業              | 7   | 0.4      |
|                  | eラーニングの活用         | 2   |          |

※付録1の自己評価で、D：取り入れていないを1、C：一部取り入れているを2、B：ある程度取り入れているを3、A：かなり取り入れているを4、として数値化し、平均を出している。

#### 4. URとの連携によるアクティブラーニング－荒江団地プロジェクト

溝上 (2014) によるとALは2000年代に入ってから高等教育で幅広く使用されるようになった用語だという。その背景には高等教育の大衆化や学生の多様化への対応を迫られた大学教育が、「学生を教える」から「学生が学ぶ」というパラダイムの転換への必要性がある。さらに、平成24 (2012) 年の中教審の質的転換答申のなかに「能動的学修 (アクティブ・ラーニング)」が明記されたことも、全国の大学でALが関心を集め、さまざまな実践や研究へと発展させていることにつながる (河合塾 2013)。本学科でも本学のプロジェクト研究の助成を受けながら、組織的にALの「実践」「研究」に取り組み、さらに推進しようと、平成29年度入学生より「教育課程」の改定も行う。ここでは、本学科のALの「実践」のなかでも、URとの連携による「実践」、通称「荒江団地プロジェクト」の平成26年度と27年度の活動報告を行う<sup>[1]</sup>。

##### (1) URとの連携の背景と意義

「平成27年版高齢者白書 (概要版)」<sup>[2]</sup>によると、日本の総人口は平成26 (2014) 年10月1日現在、1億2,708万人で、そのうち65歳以上の高齢者人口は過去最高の3,300万人 (前年3,190万人) に上る。総人口に占める65歳以上人口の割合 (高齢化率) は26.0% (前年25.1%) で、4人にひとりが高齢者ということになる。今後、総

図表5：受講者数別の回答結果

| ALの形態            |                   | 30名未満 |        | 30~60名未満 |        | 60~100名未満 |        | 100名以上 |        | 未回答 |
|------------------|-------------------|-------|--------|----------|--------|-----------|--------|--------|--------|-----|
|                  |                   | 件数    | 比率 (%) | 件数       | 比率 (%) | 件数        | 比率 (%) | 件数     | 比率 (%) |     |
| 知識の活用型／<br>応用指向型 | ケースメソッド           | 0     | 0.0    | 1        | 1.9    | 0         | 0.0    | 4      | 6.1    | 1   |
|                  | シミュレーションゲーム学修     | 0     | 0.0    | 0        | 0.0    | 0         | 0.0    | 0      | 0.0    | 0   |
|                  | 課題解決型学修 (PBL)     | 7     | 9.0    | 1        | 1.9    | 0         | 0.0    | 1      | 1.5    | 0   |
|                  | 創成学修              | 0     | 0.0    | 0        | 0.0    | 0         | 0.0    | 1      | 1.5    | 0   |
|                  | 体験学修 (インターンシップなど) | 0     | 0.0    | 0        | 0.0    | 1         | 5.3    | 1      | 1.5    | 0   |
|                  | フィールドワーク          | 5     | 6.4    | 1        | 1.9    | 0         | 0.0    | 1      | 1.5    | 1   |
| 表現指向型            | ディベート             | 0     | 0.0    | 1        | 1.9    | 0         | 0.0    | 0      | 0.0    | 0   |
|                  | 制作                | 0     | 0.0    | 3        | 5.7    | 0         | 0.0    | 0      | 0.0    | 1   |
|                  | プレゼンテーション         | 12    | 15.4   | 6        | 11.3   | 2         | 10.5   | 6      | 9.1    | 1   |
|                  | レポート              | 13    | 16.7   | 6        | 11.3   | 5         | 26.3   | 12     | 18.2   | 0   |
| 知識の定着型           | 反転授業              | 2     | 2.6    | 3        | 5.7    | 0         | 0.0    | 2      | 3.0    | 0   |
|                  | eラーニングの活用         | 0     | 0.0    | 1        | 1.9    | 0         | 0.0    | 0      | 0.0    | 1   |
|                  | 情報収集、調査、観察        | 6     | 7.7    | 1        | 1.9    | 2         | 10.5   | 4      | 6.1    | 1   |
|                  | グループ学修、グループワーク    | 10    | 12.8   | 7        | 13.2   | 2         | 10.5   | 8      | 12.1   | 1   |
|                  | 質疑応答              | 7     | 9.0    | 6        | 11.3   | 0         | 0.0    | 8      | 12.1   | 0   |
|                  | 演習、実験             | 3     | 3.8    | 3        | 5.7    | 2         | 10.5   | 4      | 6.1    | 2   |
|                  | 理解度、振り返り、疑問、質問の記入 | 5     | 6.4    | 5        | 9.4    | 1         | 5.3    | 6      | 9.1    | 0   |
|                  | 小テスト・演習問題         | 8     | 10.3   | 8        | 15.1   | 4         | 21.1   | 8      | 12.1   | 2   |
|                  | 合計                | 78    | 100    | 53       | 100    | 19        | 100    | 66     | 100    | 11  |

※3科目未回答

人口が減少するなかでも、平成32 (2020) 年、29.1%、平成42 (2030) 年31.6%、平成52 (2040) 年36.1%と、高齢化率は上昇を続けることが推定されている。

こうした高齢化はURが所有する全国の団地にも顕著に見られる<sup>[3]</sup>。UR賃貸住宅の居住者の世帯主の平均年齢は右肩上がりに増加している。昭和50 (1975) 年は37歳、平成2 (1990) 年は44.9歳、平成12 (2000) 年は51.8歳、平成22 (2010) 年は56.8歳と着実に高齢化が進んでいる。世帯主の約35%は65歳以上である。

本プロジェクトの対象である「荒江団地」(福岡市城南区) も高齢化の例外ではない。住民の25%、4人にひとり以上は65歳以上である。60歳以上の世帯は605世帯 (全1,030世帯) で、世帯の6割は高齢者世帯と言ってよい。高齢者世帯のうち一人暮らしの世帯は275世帯で、3分の1近くにのぼっている。一人暮らし世帯の85%を女性が占める。居住者の高齢化に加えて、「単身化」あるいは夫婦ふたりの「核家族化」が進んでいる。

団地住民の高齢化、単身化、核家族化は、さまざまな課題につながっていく。高齢住民からは医療や介護などの公的サービス以外にも、「緊急時対応」「日常的な見守り、安否確認」「食事宅配」など、日常生活支援に対するニーズも高い。荒江団地には「生活支援アドバイザー」が常駐している。団地内の巡回、安否確認の電話 (あんしんコール)、イベント開催の準備や運営など多岐に渡

[1] URとの連携と荒江団地プロジェクトに関しては、岩田 (2016) でも一部紹介している。

[2] 「平成27年版高齢者白書 (概要版)」内閣府 HP 平成28年9月10日取得 [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/gaiyou/s1\\_1.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/gaiyou/s1_1.html)

[3] 荒江団地に関するデータは「UR都市機構と荒江団地の現状と課題」UR都市機構九州支社住宅経営部によるプレゼンテーション資料 (平成27年4月28日)

る。さまざまな相談も受け、場合によっては公的機関への連絡も行っている。

高齢住民にはこうした生活支援が提供されるが、身体的・心理的な理由で屋外にでることが難しく、団地コミュニティのなかで孤立してしまう高齢者も多く、「孤独死」も強く懸念されている。URは最悪の事態の防止だけではなく、高齢者が健康的で生き生きとした心豊かな生活を送れるように支援することを目標にし、その実現のパートナーとして大学や若者（大学生）の力に期待を寄せている。URと大学の連携による団地での取組みは全国で見られるようになった<sup>[4]</sup>。

一方で、大学としては団地に「教育の場」として可能性を見ている。「高齢者支援」を通して、高齢化する社会の現実、地域コミュニティの現状や課題、高齢者との世代を超えたコミュニケーションなど、若い学生が集中する教室内だけではどうしても困難な理解や実践を、団地での取組みや高齢者との交流から実感・体験することができる。高齢者の支援に関して、URとALを促進したい大学との思惑は合致する。

高齢者への支援「サービス(奉仕)」と学生の学び「ラーニング(学習)」が同時に行われ、お互いに利益を得ることができる「互惠(reciprocity)」が生じるものは、ALのなかでも「サービスラーニング」といわれる(桜井 2007, 津曲 2013)。サービスラーニングは、人間的成長を促す学習方法として有効であると評価されている(桜井 2007)。本学科にとって荒江団地プロジェクトはサービスラーニングの実践として位置づけられよう。

荒江団地プロジェクトはサービスラーニング以外の意義もある。本学から荒江団地まで徒歩で10分もかからない、まさに「ご近所さん同士」なのだが、これまで組織的な交流は皆無であった。『21世紀社会の持続的発展を支える私立大学－「教育立国」日本の再構築のために－』(平成23年6月)<sup>[5]</sup>では、私立大学が中心に担う分野、つまり私立大学の使命として「地域社会に貢献する人材育成と学生を原動力とした地域社会の発展の核」「地域社会における生涯学習の場と知的コミュニティの創造」が掲げられている。地域の団地で学生が高齢者支援の取組みをする荒江団地プロジェクトは、本学が私立大学としての役割を果たすという点でも意義が大きいと考えられる。

## (2) 高齢者支援イベントの実施

平成26年度および平成27年度の荒江団地プロジェクトの活動は、図表6にまとめている。平成26年10月に本学とUR九州支社との包括連携協定が締結され、地域の課題に大学・学生が取り組み、学生の教育や研究に資するとともに、地域社会への貢献をすることが期待されるようになった。地理的利便性が考慮され、本学科は荒江団地が活動の場と決定された。平成27年2月に本学科とURの協議により、「荒江団地の高齢者支援」が本学科のプロジェクトとなり、先行して2つのゼミ(酒見ゼミと岩田ゼミ)が取組みを始めることになった。

平成27年度に入り、学生たちには、UR職員、荒江団地の生活支援アドバイザー、老人会の方々から話を聞いたり、団地のなかを見学したりする機会が設けられ、団地の高齢者の現状や課題を理解した。UR職員や生活支援アドバイザーから特に要望として出たのが、高齢者向けのイベントについてである。荒江団地では生活支援アドバイザーが中心となり、住民間の交流や趣味・娯楽・運動・学習などのイベントを年数回行っているが、参加者の固定化、イベント内容のマンネリ化が課題としてあがった。特に、高齢の女性が積極的に参加する一方で、男性の参加は少なく、男性高齢者の孤立を解消できていない。

そこで平成27年度は、多くの高齢者、特に男性に参加

図表6：荒江団地プロジェクトの歩み(平成26年度、平成27年度)

| 年度     | 日時      | 場所     | 出席者/参加者               | 内容   |
|--------|---------|--------|-----------------------|--|
| 平成26年度 | 10月20日  | 中村学園大学 | UR、本学関係者              | 包括連携協定締結   |
|        | 2月16日   | UR     | UR関係者<br>学科関係者        | 平成27年度の活動内容を確認<br>キャリア開発学科は荒江団地の高齢者支援を行うことを確認          |
| 平成27年度 | 4月28日   | 中村学園大学 | UR関係者<br>酒見ゼミ<br>岩田ゼミ | UR職員による荒江団地の現状や課題に関するプレゼンテーション@中村学園                    |
|        | 5月9日    | 荒江団地   | UR関係者<br>学生代表         | 老人会での聞き取り  |
|        | 5月19日   | 荒江団地   | UR関係者<br>学生代表         | 生活支援アドバイザーからの聞き取り<br>団地の空き部屋見学                         |
|        | 6月23日   | UR     | UR職員<br>酒見ゼミ<br>岩田ゼミ  | 各ゼミでイベントを企画、UR職員にプレゼンテーションを行う、質疑応答<br>イベント企画を修正し、準備    |
|        | 11月～12月 | 荒江団地   | UR職員<br>酒見ゼミ<br>岩田ゼミ  | チラシは各戸へ配布<br>ポスターは各棟の掲示板に貼付                            |
|        | 11月14日  | 荒江団地   | 酒見ゼミ                  | 「昔あそびでタイムスリップ」実施                                       |
|        | 12月5日   | 荒江団地   | 岩田ゼミ                  | 「動いて作ってわくわくワーク with 中村学園大学短期大学部～私たちと一緒に思い出をつくりましょう～」実施 |
|        | 11月～1月  | 中村学園大学 | 酒見ゼミ<br>岩田ゼミ          | 各ゼミで活動を総括、次年度・後輩へ向けての記録作成                              |

[4] 近隣の大学で言えば、福岡大学の星の原団地の活動がある。(http://www.ur-net.go.jp/kyusyu/kisha/pdf/20151014\_release.pdf#search=%E7%A6%8F%E5%B2%A1%E5%A4%A7%E5%AD%A6+UR+%E6%98%9F%E3%81%AE%E5%8E%9F%E5%9B%A3%E5%9C%B0' 平成28年9月18日取得

また、福岡女子大学は香椎若葉団地を舞台として、団地に入居してコミュニティを活性化させる学生の集まり(みんなのラボ@若葉)を作ったり、平成28年8月3日(水)には「こども食堂」を発想にした「わかばガーデン」を開催した(UR中村氏からの提供資料)。

[5] 日本私立大学団体連合会/日本私立短期大学協会/日本私立高等専門学校協会 http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chukyo/chukyoy9/shiryoy/attach/1319872.htm 平成28年9月18日取得

してもらえるイベントを企画・実施するという目標を定めた。学生たちは各ゼミにて「荒江団地の高齢者対象イベント」をテーマに話し合い、内容の企画を立てた。企画はUR職員、生活支援アドバイザーの前でプレゼンテーションを行い、意見や要望を取り入れ、再度企画を練り直し、最終的に企画を作った。その後、広報のために、UR職員とともに荒江団地でのチラシ配布やポスター貼付も行った。

実施までの経緯は岩田(2016)でも報告しているので、ここでは、実際のイベントについて報告を行う。酒見ゼミ(2年生11名)は、平成27年11月14日(土)10時~12時まで「昔あそびでタイムスリップ 昔あそびをしながら大学生とおしゃべりを楽しみましょう」と題したイベントを行った。高齢者が子どもの頃に楽しんだ遊びを、一緒に楽しむことでコミュニケーションをとろうとしたものである。具体的には「お手玉」(一緒に作って遊ぶ)、「あやとり」「けん玉」「わなげ」「景品つり大会」である。遊び道具や材料は学生が準備をした。学生は「お手玉」の作り方を事前に調べたり、試作をしたうえで、高齢者に教えるつもりでいたが、実際は高齢者の方がずっとうまく、学生が作ってもらったという場面もあった。男性の高齢者も少数ながら参加してくれ、「あやとり」や「けん玉」をして見せてくれた。しかし、実際に男性が一番熱心にしたのが、学生が見せた携帯のゲームであった。参加者はURの職員、小学生も含めて30名~40名であった(短時間での入退室があったため、実数は不明)。

岩田ゼミ(2年生11名)は、平成27年12月5日(土)10時~12時まで「動いて作ってわくわくワーク with 中村学園大学短期大学部~私たちと一緒に思い出をつくりましょう」というイベント名で活動を行った。学生がつくったオリジナル体操「ARAESUN体操」を一緒にした後、「写真たて作り」をした。材料は学生が事前に準備しており、それを参加者が自分好みで作っていくというものである。参加者のなかには、自分で作った人形や手芸品を持参して見せてくれる方もいた。「写真たて作り」の後は「クイズ大会&茶話会」として、荒江団地や福岡市に関するクイズを学生が出し、お茶を飲みながらクイズに回答していった。イベント後は、学生が希望者を本学の食育館に案内し、一緒に昼食をとった。イベント参加者は16名であった。この写真たて作りには後日がある。イベント日に集合写真を撮影したが、参加者のうち希望者には、後日学生がご自宅まで写真を届け、写真たてに入れてもらった。参加者からは高評価を得たが、このイベントも高齢の男性参加者は少数であった。

### (3) 荒江団地プロジェクトの成果

荒江団地プロジェクトは本学とURとの連携協定がま

ずありきで、両者とも「とにかく始めてみよう」という試行錯誤の段階であり、成果をあげたとは言いがたい。しかし、ここで一定の成果をまとめておくことは、活動継続に向けて意味がある。成果は高齢者への「サービス(奉仕)」と学生の「ラーニング(学習)」の2点から考える。

「サービス(奉仕)」としての荒江団地プロジェクトは、UR、生活支援アドバイザー、参加した高齢者からの評価からわかる。イベント当日も一緒に参加してくれたUR担当職員からは、イベントがスムーズに実施され、事故等もなかったこと、学生が熱心に活動し、高齢者も喜んでいることを評価してくれた。生活支援アドバイザーからも、恒例のイベントにはない若者が参加することで、活気のあるものとなったと感想を述べている。UR職員や生活アドバイザーからも「別に、何をしてもなく、若い人と接するだけで高齢者にもうれしいものなのかもしれない」という言葉があった。生活支援アドバイザーからの助言もあり、参加者からの実施後のアンケートはとらなかった。しかし、参加者からは「楽しかった」「ありがとう」「中村学園の食堂はいいね。また来たい」など肯定的な感想を聞かせてもらった。

一方、学生の「ラーニング(学習)」はどうだったのだろうか。学生は「ふりかえり」のために、全員での「反省会」と個人レポートの作成を行った。反省会とレポートから、1)プロジェクトの企画・運営、2)URとの連携に対して、3)高齢者に対して、4)地域社会に対しての4点で、学生たちの気づきや理解、変容があることがわかる。

#### 1) プロジェクトの企画、運営に関して

学生はひとつのプロジェクトを企画して実行していくうえでのプロセスや難しさを理解することができたようだ。

「各自の役割分担を明確にすることが大切」

「(ゼミ生同士で)進捗状況を報告しあうことの重要性を痛感した」

「高齢者、男性をターゲットに参加を募集したが、このターゲットを考える際にも、まずは現状を把握して課題を見つけ、どうしたらよいかを考えた」

「一つのイベントを作り上げるには、膨大な時間とアイデアが必要であると実感しました」

「みんなの意見をまとめ、企画にしていける事の難しさを知りました」

「ゆっくり話し合いを重ねることで、企画はできあがるんだなと思いました」

一連のプロセスのなかで、学生は仲間との信頼感や協働の楽しさを体感している。

「プロジェクトを進めるうえで一番大切なのはチームワークだとわかった」

「ゼミの全員と仲良くなることができました。最初のうちは発言をしてもらうのも気を使っていましたが、最後はみなければいい意見を言ってくれたり、発表しやすい環境で、みなとの壁が無くなったと感じました」

プロジェクトの企画や運営、仲間たちとの協働作業を通して、学生たちは達成感を感じている。

「計画から実行の流れがスムーズにいったことが素直に嬉しかった」

「企画や準備をする際、前提となる目的・目標の重要性を実感した」

「自分たちで一から計画し、開催したので楽しかったですし、やりがい・達成感を味わいました」

「今回のプロジェクトで私が身についたことは、恐れずにたくさん発言することでした。どんな変な案でも発言することで自分に自信も付きましたし、何よりプロジェクトを前向きな気持ちで進めることができました」

「実際に自分たちが企画したものを行えたときは、喜びと達成感がありました」

## 2) UR との連携に関して

学内では体験することが難しいことを UR との連携で学生は体験できたと考えていた。

「UR の人たちにプレゼンテーションをしたり、企画を練り直して試行錯誤することによって、考えをまとめる力、話す力、質問する力を身につけることができました」

「企業の方の前でのプレゼンテーションをして、社会人としての基礎力が身についたと思う。企業の方とのやり取りは本当に貴重な経験であったし、問題を改善する力、また提案発信する力は本当に身についた経験になったと思う」

## 3) 高齢者に対して

学生の多くは祖父母と生活しておらず、会うのも年に数回という学生が多かった。日常的に高齢者と話しをする機会がなく、本プロジェクトでの交流は、学生がさまざまなことに気づききっかけになっている。

「参加していただいた高齢者から学ぶこともあり、昔の話の中から生きる知恵だったり、今の生活で不便なことから、これからの私たちにできることを学ぶことができた」

「普段話さない高齢者の方と話すことによって楽しい会話ができ、高齢者と話すことが楽しかった」

「高齢者と話す時のネタや接し方について学んだほうがもっと話題が広がっていくのではないかな」

「高齢者と普段かかわることが少ないので、計画段階では正直不安でした。(中略) 実際試してみても、高齢者が活き活きしていて、仲良くお話をできたりと満足度は高い結果になりました。」

「荒江団地から中村の食堂に行くまでの道のりで、なかなか会話をすることができず、コミュニケーション力を高めなければいけないと思いました。同年代の人と話すだけでなく、目上の方と話すことでためになることをたくさん吸収できると思うので、積極的にコミュニケーションをとっていきたいと思います」

「高齢者の方々とたくさん接することにより、日本の直面している問題を身近に考えることができるようになりました」

## 4) 地域社会への意識

学生は友人コミュニティや大学コミュニティ、あるいは近年は SNS などのバーチャルコミュニティへの意識は高いが、自分たちが住んでいる地域社会への関心は希薄であるといわれている。本プロジェクトに関わった学生からは、地域社会への意識と自分の住む地域の活動に積極的に関わる学生の姿も見られた。

「大学に入って地域の方とかかわる機会がなかったので、このプロジェクトはできてよかったです」

「今後も自分の住む地域との関わりは大切にしていきたい」

「自分も団地に住んでいるので、高齢者の人ともっと積極的に関わっていこうと思うことができたので良かったです」

「このプロジェクトを通して自分の住んでいる団地の手伝いもしていきたいと思い、クリスマスパーティーを準備したり、もちつき大会にも参加したりとアクションの面がすごく伸びたと思いました」

以上、本プロジェクトの成果について述べてきた。一定の成果は残せたが、これが最善であるとは言えず、今後とも検討していかなければならないことは多い。

本プロジェクトの高齢者支援は、高齢者と大学生(若者)との交流を軸にしている。福田他(2015)によると

大学生と高齢者の交流には温度差があるという。調査した大学生の6割は高齢者との交流・生活支援活動へ参加したいと答えているが、高齢者は「ややしたい」(34.8%)「あまりしたくない」(27.0%)と約6割が参加の意思が低い。高齢者が大学生に望む支援は「ちょっとした力仕事」(18.9%)「安否確認」(10.6%)「電球の交換や高い所の物をとる手助け」(9.3%)で、一方、大学生が可能と考える高齢者への生活支援は「話し相手」(20.3%)「ちょっとした力仕事」(16.4%)、「安否確認」(14.7%)の順であった。

大学生は「話し相手」が高齢者への支援と考えているが、高齢者の「話し相手」希望は6.3%と低い。その理由を、福田他(2015)は大学生が高齢者に対して「周りの人とのふれあいが少なく、孤独である」という固定的なイメージがあるため、「話し相手」が上位にきたと分析している。一方、高齢者も若者に対して「話しにくい」「何を考えているのかわからない」(渡邊他 2010)など否定的なイメージを抱いている。世代間交流事業に社会的な関心が集まっているが、高齢者と若者の交流には課題が多い(村山他 2013)。高齢者と学生との意識やイメージの違いは、荒江団地プロジェクトへの今後の課題ともなる。

荒江団地プロジェクトはまだ始まったばかりで、現時点では試行的な段階にとどまっているが、実践を通して課題を発見・解決しながら、今後ともプロジェクトを継続・発展させ、学科の組織的なAL(サービスマーケティング)の取組みとして推進していく予定である。

## 5. おわりに(今後のアクティブラーニングへ向けて)

本稿では本学科のAL「研究」として学科のAL実施状況についてのアンケート調査を実施し、結果を分析した。本調査ではALを広義で捉えたためか、あるいは「アクティブラーニング」という言葉が浸透し教員が意識的に導入を始めたためだろうか、本学科の多くの科目でALが実施されていた。しかしながら、ALのなかでも小テストの実施など「知識の定着・確認型」は多いものの、構造の自由度が高く、活動範囲が広い「知識の活用・創造型」は少ないことがわかった。その理由については、本調査では明らかにはできなかったが、今後は教員からの聞き取り調査などを行い、多様な形態のALを学科で展開できるようにしたい。

また、ALの「実践」のひとつとして荒江団地プロジェクトについて報告した。平成27年に始まったこのプロジェクトは試行の段階ではあるが、地域への「サービス」と学生の「ラーニング」の点からも発展をさせていくべ

きものであると考えている。地域コミュニティの支援に、世代間交流をいれていくことには、高齢者にも、若者にも、そして大学、URにも意義があると考えられる。しかし、ただ単に「若者の力を使う、借りる」ではなく、交流を通してのコミュニティ「再生」、あるいは、「超高齢化」に向けてのコミュニティ「新生」の萌芽に発展させていくことは、私立大学の使命かもしれない。

本学科はALを重要な教育方法と位置づけ、上記のアンケート調査実施などの「研究」、荒江団地プロジェクトなどの「実践」、そして平成29年度からの新しい「教育課程(カリキュラム)」と、「研究」「実践」「教育課程(カリキュラム)」の3つの方向からALの推進を行っている。今後も、このAL推進の方向性を学科全体で堅持していく。

本研究は、平成27年度および平成28年度プロジェクト研究「キャリア開発学科におけるアクティブラーニング導入実践についての研究」[研究代表者：酒見康廣(平成27年度)、岩田京子(平成28年度)]で行われた研究成果の一部である。

## 【謝辞】

荒江団地プロジェクトに関して、UR九州支社および荒江団地生活支援アドバイザーに多大なご協力をいただきました。感謝申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- 岩田京子(2016)「サービスマーケティングの実施準備に関する一考察—本学科への適応を視野に入れて—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』第48号, 241-246
- 亀倉正彦(2016)『失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング』東信堂
- 河合塾編著(2013)『「深い学び」につながるアクティブラーニング 全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂
- 桜井政成(2007)「地域活性化ボランティア教育の深化と発展：サービス・ラーニングの全学的展開を目指して」『立命館高等教育研究』第7号, 21-40
- 中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)
- 津曲隆(2013)「サービスマーケティング評価のための分析枠組みに関する考察」『アドミニストレーション』第19巻(2), 101-126
- 成田秀夫(2016)『アクティブラーニングをどう始めるか』東信堂

- 福田峰子・加藤智香子・梅田奈歩・藤丸郁代・大島圭恵・城憲秀  
(2015)「大学生・高齢者間の交流・生活支援に対する意識調査」『中部大学生命健康化学研究所紀要』Vol.11, 73-78
- 松下佳代・石井英真(2016)『アクティブラーニングの評価』東信堂
- 溝上慎一(2007)「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』第7号, 269-287
- 溝上慎一(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 溝上慎一・成田秀夫(2016)『アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習』東信堂
- 村山陽・竹内瑠美・大場宏美・安永正史・倉岡正高・野中久美子・藤原佳典(2013)「世代間交流事業に対する社会的関心とその現状 新聞記事の内容分析および実施主体者を対象とした質問紙調査から」『日本公衆衛生雑誌』第60巻第3号, 138-145
- 安永悟・関田一彦・水野正朗(2016)『アクティブラーニングの技法・授業デザイン』東信堂
- 山地弘起(2014)「アクティブ・ラーニングとはなにか」『大学教育と情報』No.1, 2-7
- 渡邊裕子・小山尚美・流石ゆり子・河野由乃・萩原理恵子・森本清・水口哲(2010)「地域リーダー・高齢者の若者イメージと若者の交流に対する期待感—『看護学生との交流事業』参加前の調査から—」『山梨県立大学看護学部 紀要』Vol.12, 9-18

付録1：アンケート調査用紙（アクティブラーニングの実施状況）

科目別アクティブラーニングの実施状況

・前学期・後学期でのご担当のすべての科目について回答をお願いします。  
 ・学修評価については、一部でも取り入れられている項目にはチェックを入れてください。  
 ・自己評価は、左側の学修形態の中のものとも進んでいる1つの項目についての評価をしてください。  
 (D：取り入れしていない、C：一部に取り入れられている、A：かなり取り入れられている)

| 科目名  | 1. 30名未満 | 2. 60名未満 | 3. 100名未満                 | 4. 100名以上 |
|--|----------|----------|---------------------------|-----------|
| 学修形態                                       | 自己評価     |          |                           |           |
| 知識の活用型/応用指向型                               |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> ケースメソッド           |          |          | D ----- C ----- B ----- A |           |
| <input type="checkbox"/> シミュレーション/ゲーム学修    |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> 課題解決型学修 (PBL)     |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> 創成学修              |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> 体験学修 (インターシブなど)   |          |          | D ----- C ----- B ----- A |           |
| <input type="checkbox"/> フィールドワーク          |          |          |                           |           |
| 表現指向型                                      |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> ディベート             |          |          | D ----- C ----- B ----- A |           |
| <input type="checkbox"/> 制作                |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> プレゼンテーション         |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> レポート              |          |          | D ----- C ----- B ----- A |           |
| 知識の定着型                                     |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> 反転授業              |          |          | D ----- C ----- B ----- A |           |
| <input type="checkbox"/> eラーニングの活用         |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> 情報収集、調査、観察        |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> グループ学修、グループワーク    |          |          | D ----- C ----- B ----- A |           |
| <input type="checkbox"/> 質疑応答              |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> 演習、実験             |          |          |                           |           |
| <input type="checkbox"/> 理解度、振り返り、疑問、質問の記入 |          |          | D ----- C ----- B ----- A |           |
| <input type="checkbox"/> 小テスト・演習問題         |          |          |                           |           |

(高) ← 能 動 性 → (低)

※ アクティブラーニング導入の適性度合いについては、各科目の特性により、事情が異なってきます。必ずしも、この表の上側がよりよいという意味ではありません。

付録2：アンケート調査用紙（アクティブラーニンググッズ）

アクティブラーニンググッズ

アクティブラーニングに対して特徴的な工夫や仕組み、コツなど、実際に実施されていないものでも、アイデアだけでも構いません。何らかのヒントになるようなものをお持ちの場合は、下の欄に簡単に記してください。  
 (例：グループで話し合う前に、個人で考える時間を必ず取る)

|  |
|--|
|  |
|--|